

## イエスのことば 第19回

わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていないならば、あなたがたは決して天の御国に入れません。(マタイ 5:20)

## □イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

## □文脈の確認

1. 「承」の部に入っている。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。
2. これまでに 11 の権威を見てきた。
  - (1) 病の癒しに関する権威。カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
  - (2) 教えに関する権威。ルカ 4:32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」
  - (3) 悪霊に対する権威。イエスが人に憑いていた悪霊を叱って、一言「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊は出て行った。
  - (4) 病気に対する権威。シモン・ペテロの義母を慢性的な熱病から瞬時に解放した。
  - (5) 自然界に対する権威。昼間に網を下ろさせて大漁。ペテロたち 5 人の弟子がパートタイムの弟子からフルタイムの弟子へ。6 番目の弟子としてヤコブが加わる。
  - (6) 律法上の汚れに対する権威。ツァラアト患者の清めがなされた。ユダヤ議会が、イエスはメシアである可能性ありと見て、公式調査に入った。
  - (7) 罪の赦しにおける権威。中風の人に、神の立場から罪の赦しを宣言したうえで、病気を癒した。公式調査（観察・審問・判定）は観察段階から審問段階へ。
  - (8) 人に対する権威。取税人レビ（マタイ）を 7 番目の弟子として加え、レビの家でのもてなしを受けて、取税人仲間や遊女と一緒に宴会の席に着いた。調査団からの非難に対して、「わたしは罪人を招いて悔い改めさせるために来た」と言われた。
  - (9) 人の伝統に対する権威
    - ① 断食の伝統：調査団から断食の伝統に従わないことについて質問され、メシアが来ている今は喜ぶべき時であり、断食する時ではないと答えた。
    - ② 「言い伝え」の伝統：「古い衣・古い皮袋」のたとえ話を通して、イエスはそのような伝統とは関係しないと明言した。これは、パリサイ派が抱いていたメシア像＝メシアは「言い伝え」を完成してくださる、を覆すものであった。

## (10) 安息日に対する権威

- ① ベテスダの池での癒し：紀元 28 年の春、過越の祭りのときに、イエスはエルサレムに上った。安息日に、イエスは、意図的に言い伝えを破って、中風患者を癒やした。エルサレムの指導者たちはイエスを非難したので、イエスはご自身の神性について語った。これにより、指導者たちの中で、イエスを排除しようとする動きが出始める。
- ② 麦の穂事件：安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。弟子たちが空腹のために、麦の穂を摘んで口に含んだ。そば近くで監視している調査団は、それを見て、安息日に関する言い伝えに反するとしてイエスを非難した。これに対してイエスは、安息日の本来の意味について「安息日はイスラエル民族のために（奴隷から解放されて自由の民となったしるしとして）与えられた」と教え、「人の子は安息日の主である」と答え、メシアは安息日にしてよいこと、してはならないことを決める権威を持っていると宣言した。
- ③ 右手の萎えた人の癒し：安息日にイエスが会堂で教えているときに、調査団（ユダヤ教指導者たち）は意図的に手の萎えた人をイエスの目の前に送り込んだ。イエスが安息日に関する言い伝えを破ってその人を癒やすのかどうか、もし癒やしたら安息日破りで訴えようとしたのである。イエスは、指導者たちの意図を見抜いていた。イエスを陥れようとしている指導者たちの前で、手の萎えた人を癒やした。
  - この事件により、指導者たちは、イエスをどのようにして殺そうかと相談し始めた。

(11) 病の癒しに関する権威。国の内外から大勢の人々がついて来た。病気に悩む人たちは、イエスにさわろうと押し寄せてきた。イエスにさわると、癒されたからであった。

- 弟子たちの中から、12人の使徒たちを選んだ。

3. 今回は、モーセの律法を解釈する権威である。

- (1) これまでは、言い伝えを巡っての、イエスと調査団（ユダヤ教指導者たち）との対立であった。
- (2) 言い伝えは、中間時代のユダヤ教が、モーセの律法のまわりに設けた垣根のようなものである。当時のユダヤ教指導者たちは、言い伝え（具体的細則）を守ること、モーセの律法を守ったことになり、義を得て神の国に入ることができると教えた。【補足】中間時代とは、旧約聖書の最後の巻マラキと新約聖書の時代の間の約 400 年。
- (3) それに対して、イエスは、言い伝えは外面的・形式的に律法に守ったかのように

取り繕うだけであり、そのような義では神の国に入ることはできない、と教えた。そして、モーセの律法が示す真の義とは、どういうものかを、ここで示す。

- (4) 聖書箇所は、マタイ 5:1~8:1、ルカ 6:17~49 である。いわゆる「山上の説教」と呼ばれる箇所である。説教の内容を一言で言えば、モーセの律法についてのメシアによる正統な解釈であり、そのテーマは、**真の義**である。
- (5) この説教を通して、イエスは、メシアがモーセの律法を解釈する権威を持つことを示した。この説教を聞いた群衆の反応を、マタイは次のように記した。「イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」(マタイ 7:28~29)

#### □本日のアウトライン

1. 場面設定
2. 説教の内容
  - (1) 真の義を得た人々について
  - (2) モーセの律法の解釈
  - (3) 真の義の行い
  - (4) 真の義の実践
  - (5) 4つのペアを用いての警告
  - (6) 結び

1. 場面設定 マタイ 5:1~2、ルカ 6:17~20a
  - (1) イエスは、その山の上へ登った (マタイ 5:1a)
  - (2) そこは平らなところであった (ルカ 6:17)
  - (3) イエスは座った (マタイ 5:1b) ラビが教えるときは「座る」
  - (4) イエスの弟子たちが同席していた
  - (5) 大勢の人たちが来ている。彼らは、近隣のガリラヤ地方の人たちだけではない。ユダヤ全土、エルサレム、そしてツロやシドンといった地中海沿岸の地域からも来ていた。彼らが来ている目的は3つ (ルカ 6:17~19)
    - ① イエスの教えを聞くため
    - ② 自分たちの病気を癒やしてもらうため
    - ③ 悪霊から解放してもらうため
  - (6) イエスはご自分のところに来た人々を皆、癒したが、イエスの関心事は弟子たち、特に直前に任命していた 12 人の使徒たちを教えること。ルカ 6:20、「イエスは目を上げて、弟子たちを見つめながら、話し始められた」。

## 2. 説教の内容

### (1) 真の義を得た人々について

- ① 義を得た人々の現在と未来（マタイ 5 : 3~12、ルカ 6 : 20b~23）
  - 「幸いである」=真の義を得ている信者であるということ
  - イザヤ 61 : 1 「貧しい人」「心の傷ついた者」
  - 神との関係で幸いである（マタイ 5 : 3~6）
  - 人との関係で幸いである（マタイ 5 : 7~12）
- ② 義を得ていない人々の現在と未来（ルカ 6 : 24~26）
- ③ 義を得た人々の、世との関係における役割（マタ 5 : 13~16）
  - 地の塩（マタ 5 : 13）
  - 世の光（マタ 5 : 14~16）

### (2) モーセの律法の解釈

- ① メシアとモーセの律法の関係（マタイ 5 : 17~20）
  - メシアは律法や預言者を廃棄するためではなく、成就するために来た
  - 律法の一点一画も消え去ることなく、実現する
  - 律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、神の国には入れない
  - 律法学者やパリサイ人の義とは、言い伝えを守ること
- ② 言い伝えと比較して、律法の本来の意図（マタイ 5 : 21~48）・・・言い伝えは外面的・形式的、律法が意図する真の義は内面的・根源的。
  - 殺人（21~26 節）
  - 姦淫（27~30 節）
  - 離婚（31~32 節）
  - 誓い（33~37 節）
  - 無抵抗（38~42 節）
  - 愛（43~48 節）
- ③ 【補足】律法を通して生じるのは罪の意識です（ロマ 3 : 20）。こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです（ガラ 3 : 24）

### (3) 真の義の行い

- ① 原則：人に見せるためではない（マタイ 6 : 1）
- ② 真の義の行いの事例
  - 施し（マタ 6 : 2~4）
  - 公の祈り（マタ 6 : 5~15）
  - 断食（マタ 6 : 16~18）

## (4) 真の義の実践

- ① 金銭について (マタイ 6:19~24)
- ② 思い煩いについて (マタイ 6:25~34)
- ③ 人をさばくことについて (マタイ 7:1~6、ルカ 6:37~42)
  - 「自分がさばく、そのさばき」(マタイ 7:2)・・・パリサイ人や律法学者たちが作った規則である『言い伝え』で、兄弟(ユダヤ人)をさばくこと。そのようなことをしてはならない。
  - 偽善者(マタイ 7:5) = パリサイ人や律法学者たち
- ④ 祈りについて (マタイ 7:7~11)
- ⑤ 真の義を実践するときの動機 (マタイ 7:12)

## (5) 4つのペアを用いての警告

- ① 2つの道 (マタイ 7:13~14)
  - 広い道 = パリサイ人の道、言い伝えを守っていれば神の国に入ることができる → 実際は、滅びに至る道。そこから入って行く者が多い。
  - 狭い道、狭い門 = イエスをメシアとして信じる道、信者は聖霊によって新しく生まれる (ヨハネ 3:3~15)。それを見出す者はわずか。
- ② 2本の木 (マタイ 7:15~20)
  - 真の教師または預言者、偽教師または偽預言者、どこが違うのか。
  - 真の教師は、モーセの律法が教える真の義に応じた実を結ぶ
  - 偽教師は、人が作った『言い伝え』に従う
- ③ 2つの告白 (マタイ 7:21~23)
  - 偽教師たちは、「主よ、主よ」と言う。預言をする、悪霊の追い出しをする、多くの奇跡(力あるわざ)を行う = 特に癒しを指す
  - パリサイ人や律法学者たちは、イエスに対して「主よ、主よ」とは呼ばなかった。この偽教師たちは、Ⅱペテロ 2:1で警告され、ユダ 4節で実際に教会の中に登場した、偽の信者である。よって、預言的内容である。
- ④ 自分の家を建てた2人の人 (マタイ 7:24~27)
  - イエスのことばを聞いて、それを行う・・・岩(=メシア)の上に自分の家(=人生)を建てた賢い人 = イエスをメシアとして受け入れたユダヤ人信者たち
  - イエスのことばを聞いて、それを行わない者・・・砂(=人が作った『言い伝え』)の上に自分の家を建てた愚かな人 = イエスをメシアではないと拒否し、言い伝えに従っていく人
  - 【補足】洪水 = 大軍(紀元70年、エルサレムを囲んだローマ軍)

## (6) 結び (マタイ 7:28~8:1)